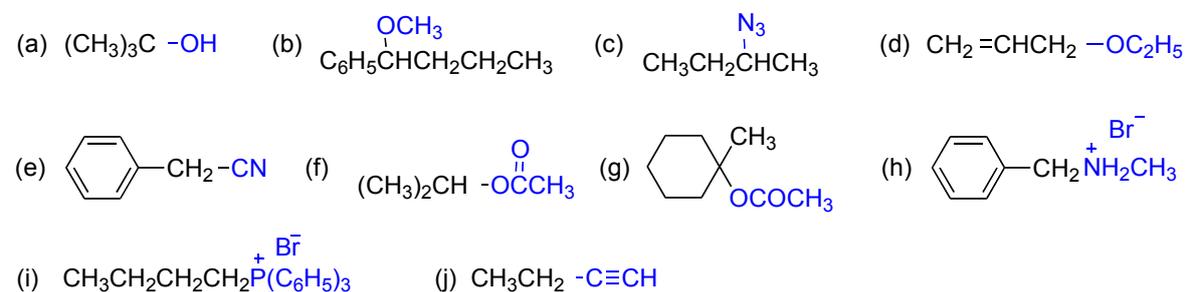


6 章

6.1

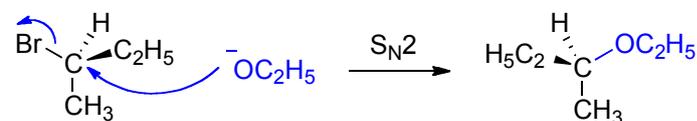
(a) 2-クロロ-2-メチルプロパン, 塩化 *t*-ブチル (b) ジヨードメタン, ニヨウ化メチレン (c) フルオロシクロヘキサン, フッ化シクロヘキシル (d) 3-ブロモ-1-プロペン, 臭化アリル, 臭化 2-プロペニル (e) クロロフェニルメタン, 塩化ベンジル, 塩化フェニルメチル (f) トリブロモメタン, ブロモホルム (g) 5-ブロモ-2-メチル-2-ヘキセン (h) シクロプロピルフルオロメタン, フッ化シクロプロピルメチル (j) *trans*-3,4-ジブロモシクロヘキセン

6.2 青色が置換された官能基を示す.

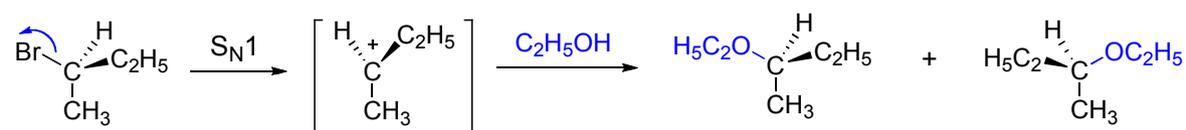


6.3

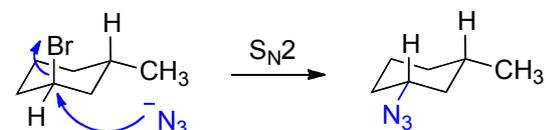
(a) $\text{S}_{\text{N}}2$ 反応が起きるので、立体反転する.



(b) $\text{S}_{\text{N}}1$ 反応が起きるので、ラセミ化する.

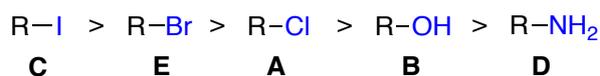


(c) $\text{S}_{\text{N}}2$ 反応が起きるので、立体反転する.

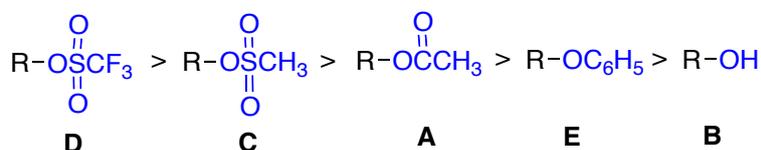


6.4 強酸の共役塩基となる置換基が脱離基として優れている (p.105 参照)

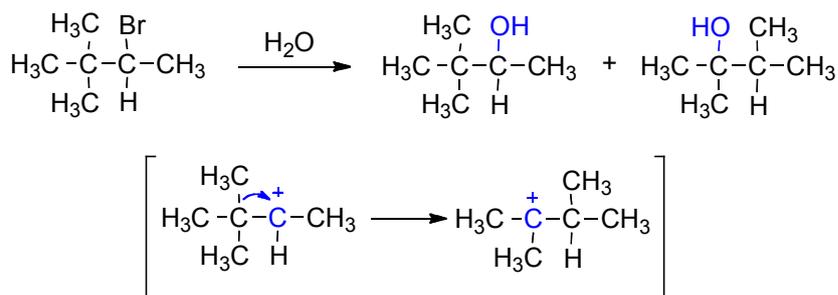
(a)



(b)



6.5



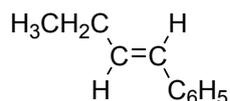
反応は $\text{S}_{\text{N}}1$ で進行する。カルボカチオン中間体においてメチル基が移動して、より安定な第三級カルボカチオンが一部生成する。

6.6 水酸化ナトリウムやナトリウムエトキシドのような一般的な塩基を用いた場合を記す。なお、カリウム *t*-ブトキシドのような立体的にかさ高い強塩基を用いた場合には、位置選択性が逆転することもある (p.108 参照)。

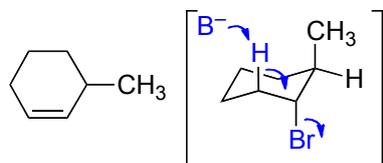
(a) 水酸化ナトリウムやナトリウムエトキシドを用いた場合、より安定な三置換アルケンが主生成物となる。



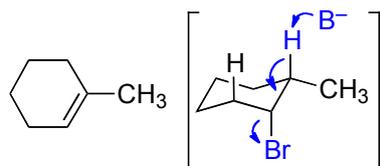
(b) より安定な(*E*)-共役アルケンが生成する。



(c) アンチペリプラナー配座をとって、アンチ脱離で進行する。

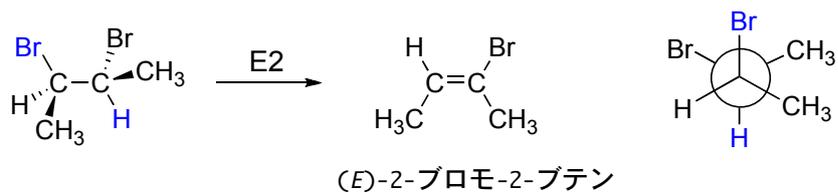


(d) アンチ脱離で進行し、より安定な三置換アルケンが生成する。

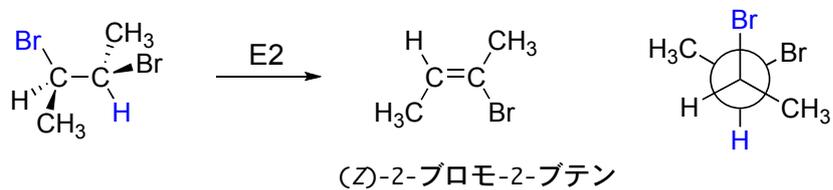


6.7 アンチペリプラナー配座をとって、アンチ脱離で進行する（もう一組の HBr が脱離しても同じ結果になることを確かめてみて下さい）.

(a)



(b)



(c)

